



# 東京ミッション研究所ニュース

第 92 号  
2021 年 11 月発行

〒189-8512 東京都東村山市廻田町 1-30-1 東京聖書学院内  
TEL/FAX 042-396-5597 郵便振替 00150-5-29091



## 「日本宣教を考える」

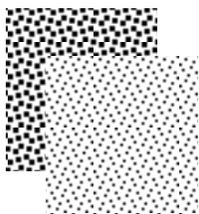
南野浩則 MB 石橋キリスト教会副牧師  
福音聖書神学校教務、TMRI 理事

TMRI の活動の目的として「日本におけるキリスト教会の宣教上の諸問題に対する歴史的・社会的・宗教的・神学的・聖書的、および実践的な学問的研究を進める」という理念が挙げられています。日本の宣教のために神から与えられた役割を果たす、そのような意気込みが表明されています。キリスト教会にとって宣教は自らに課してきた働きの一つです。世界の大多数の宗教が他文化について関心を示さず、自らの教えを広めていくという発想を持っていないのとは対照的です。キリスト教会の宣教の動機についてはいろいろな意見がありますが、神ご自身の属性・性格に宣教の根拠が求められるようになりました。同時に、宣教そのものが目指す目標、その内容などの議論が継続して行われています。

欧米主導の宣教が日本では進められてきました。それは当然です。先にキリスト教について知っている人々が志をもって先導してくれなければ、福音は誰にも伝わりません。宣教師や宣教師を送り出した人々の苦労や犠牲は大きなものであったでしょうし、今も変わりなくそうです。その一方で、宣教において、福音は伝えられた側に投げかけられます。なぜならば、福音を伝えられた人々は、その福音に基づいて生きていくからです。福音を受け取る者は一方的な受領者としての立場を脱却し、神の支配を自ら実現していきます。そのためには、自分たちの言葉で福音を理解し直し、自分たちの言葉で福音を宣教してい

かねばなりません。日本の宣教においてこの作業が軽視されてきた事実があると思います。神学的な作業もまだまだ欧米神学に依存しています。それは、先達としての欧米の教会やその神学を否定することではありません。欧米の神学は良い影響を今でも日本に与え続けていますし、TMRI も海外に由来する最善の業績を紹介しています。しかし、そのような良い影響を日本の文脈の中で咀嚼して、自らの言葉として表現する試みをしなければ、福音は社会から遊離したままになります。この課題はつねに日本の教会に問題として意識され続け、繰り返し議論されています。

2つのことを考えてみたいと思います。1つは福音理解の再構築です。西方教会はキリストによる贖罪を自らの神学の中核に置いてきました。もちろん、聖書には贖罪論が述べられていますし、教会にとってキリストの赦しは重要な考えであり実践です。しかし、贖罪論だけで福音が成立しているわけではありませんし、むしろ、福音は神の支配(神の価値観が成立している状態)の実現に依拠していると個人的には考えています。もう1つは、日本社会へのアプローチです。これまで政治や文化の視点から日本宣教について考えられてきました。それに加えて、資本主義への評価・批判という観点が必要だと思います。経済の成り立ちは私たちの生活の根底を支え、政治や文化を作る大きな力になっています。数多くの国々と同様、日本が……(7頁につづく)



## 平和づくりの神学 現場から聖書に聞く

2021年6月28日～30日開催

片野敦彦(セッション1,3-5,7)

宮崎 誉(セッション2,6)

※聖書学院修養生のレポートから選び、一部を修正して掲載しています。

Report by 津田和明 (本科3年)

### ■平和づくりへの修復的アプローチ

平和とは何か、どういう状態が平和かを考えさせられた。学校教育では、過去の大戦と原子爆弾被爆国としてのインパクトが大きすぎるのか、平和教育イコール反戦教育となっている。だが実際、平和とはもっと広義なものであり、実際戦争が起こらなかった平成の間、人と人との間にとっても平和とは呼べないような壮絶な出来事がたくさんあった。戦争は確かに、たくさんの方が命を失い、傷つき、憎しみ合い、常軌を逸する異常な状態へと人を変えてしまう避けるべきものの筆頭ではあるが、人と人との間の平和はもっと日常的なところから必要とされていることだ。

戦争の特徴として暴力が挙げられるが、暴力はDVなど物理的暴力もあるが、言葉の暴力、差別も暴力である。物理的な暴力は身近な人に振られることが顕著であり、最近では言葉や態度で心を殺す暴力が顕著である。日本では小中高生の死因の第一であること、心を殺された結果、命を断つことを思うと心が痛む。

平和を大切にするとということと当たり前の事を言っているように聞こえるが、自分にとって不快な存在、目障りな人間を「平和を乱す人間」とする。こうした、陰湿に遠回りに抹殺しようとする傾向が、近年ネットなどを通して広がっている。さらに、これを平和のためだと正当化する傾向もある。

メノナイトのことを知れたことはよかった。徹底した非暴力や、兵役の代わりに皆がやりたがらない仕事で人に仕える姿勢は、ローマ時代の迫害下のキリスト者のあり方を彷彿とさせ、イエスの弟子としてどのように生きるのかが、自らに問われた。ポイントとしてそこに傷ついた人がいるかということが取り上げられた。教会内、教団内でも

見て見ぬ振りの傷ついている人はたくさんいる。立場的に声をあげたいけれどあげない(あげるとさらにややこしいことになるから)人も多いだろう。そういう傷ついた人たちを放置し続けてはいけないと感じた。献身者や神学生、牧師夫人も声をあげにくい立場にある。

### ■平和神学の聖書神学的基礎(宮崎師)

トーマス・ヨーダー・ニューフェルドの4つのシャロームという捉え方が興味深い。イエス・キリストは私たち教会にとってのシャロームそのものであり、キリストの到来によって人が罪赦されて、神と和解するところにキリストの平和、シャロームがある。この縦軸と同時に、横軸のシャローム、隣人を愛することも重要である。十戒の項目も神との関係性、人との関係性で構築されている。事実、第一に神を愛し、そして第二に隣人を愛せよというイエスの愛の律法は、神からモーセが受けた律法を覆う。神と隣人を愛することとシャロームは密接に結びついている。

### ■ロールプレイで考える応報と修復

ロールプレイでは問題を起こした高校生のグループを担当した。私自身、元問題児(今も?)であって、それと同時に先生と呼ばれる立場の人たちから傷つけられてきた立場であった。

他にもう一人元問題児の先生もおられて、リアルな意見が出た。問題が起きるには何か原因がある。表向きには見えていない闇、傷がある。問題児本人だけでなく、問題児の家族と家族の背景、問題児の担任や部活の顧問、その先生方の背景など、問題の背景にある傷は多岐にわたる。傷ついた人に遣わされて、仕えて、そこに平和を作る人となること。それがキリスト者としての大切なひとつの役割。そこにはキリストの愛が溢れている。

## ■平和つくりとイエスのたとえ

よきサマリア人の話では、被害者の人が強盗によって持っていた様々なものを奪われていく。それに対して、サマリア人はその人が失ったものを一つひとつ満たしていくという対比がある。そうやってボロボロになった人が人間としての尊厳を取り戻していく。メノナイトの見方として、傷ついた者の叫びがあるところから神の正義が始まっていくというのが興味深い。

たとえ話で取り上げられたのはよきサマリア人のたとえ。オーストラリアでは誰でも全力で助ける場合、それに伴う過失を問わないらしい。逆に助けられるのに助けないのは罰が伴うという話が面白い。最近の日本ではどうだろう。関わることは愛することの始まりだが、できるだけ厄介なことは避けたいのが現代の日本人の心情だろう。助けなくてもよいとは、つまり、助けられる保証はないということ。交通事故で助けられずに死亡した D.ボッシュのことをふと思い出した。これは助けられない自由があるということなのだろうが、本当にそれは自由なのだろうか。愛を法にすることは大変難しい。愛は法を超えるものであるから。

## ■福音書と主イエスの平和(宮崎師)

敵を愛せについて。同族のみへの愛は自己愛の延長線上だというのが興味深い。どこまで愛するのかという線引きについて私たちは合理的な考えで線引きしているだろう。自分に好意的な人間、もう少し広げても無害な人間。自分へ憎しみを持った人間を愛するには、その人たちと関わる必要が出てくる。その過程で自分が傷つくこともあるだろう。そう考えるとなかなか難しい。だが愛することについて主ご自身が十字架で示してくださった愛はご自分を十字架の死にまで、父なる神との断絶にまで追い込むものだった。しかもその愛は自分を蔑み、罵倒し、殺そうとする人間に対してそこまでやる愛だった。私たちの中にそのような愛があるだろうか。最近の傾向として、人が人を身勝手に断罪するのを目にすることが多いが、神の恵みは良いものにも悪いものにも注がれているように、神の愛に境界線はない。神が愛するものを私たちが愛さないのはどうなの

か。私たち自身、もともと、いや、今でも愛し難い者たちではないか。そういう意味では、愛することに境界線を引く時に私たちの境界線の先は、私たち自身と神の間に続いていると言える。そして神に愛されているものとしてそこに本来あるべき自分自身の姿を見出す私たちとしては、愛する境界線を取り払うことは、神の愛のうちに自分自身を回復すること、そして、神にあって健全な自己愛を取り戻すことにもつながる。

## ■聖書的正義を捉え直す

近代刑法の問題点についてはよく考えていた。オランダは日本よりもずっと受刑者の人権や、社会復帰を考慮した法に則っているが、再犯率は非常に低い。日本の受刑者が出所後日本社会に受け入れられるためには、未だに高いハードルがある。

聖書は正義の定義が非常に広いことを知った。確かに正義は聖書の中で、そして、神学の中で神の本質を表す一つとして、重要な要素である。翻訳上正義と訳されていない正義がたくさんある。神はあらゆることを正される。正義は神の業。正義の神は、神に向かって嘆き、祈る人々のニーズを大切にされる。社会のすみに追いやられた人々、困っている人々に駆け寄る救護者である。加害者、被害者、地域社会の修復に向かう営みは、神の正義につながっている。神の性格と意図を表すものとなるよう招いている。正義は神のありように依存している。

イエスの役割は、弱い人たちへ正義を告げ知らせることで、真の愛によってトラウマを癒し、エンパワーする。罪責は消去できても、恥はコミュニケーションによる赦しがなければ難しい。

満足せず、安逸をむさばらず、常に動き続け、修復できるか否かではなく、修復を目指して動き続けること。現状に満足することが修復的正義の逆なのだと学んだ。だとすると、どこまで行けばいいのかという問いが残った。

平和つくりの営みは、加害者との取引ではないし、加害者によって方向づけられたり、左右されたりするのでもない。先に赦しを与え、解放し、立ち上ろうとする一歩から始まる。神のなさる業

への参与として始まるからなのだろう。そこでは、被害者であることによって、自分の人生を決定づけられているところから解放される。赦しが人が目指し獲得することではなく、神の業によって与えられる恵みとなる。

この神の業としての平和つくりへの参与は、窓を壊したら直す、弁償する、落ち込んでいる人がいたら励ますなど、当たり前とされる事々に具現化する。だからこそ、傷ついているのは誰か、その人のニーズは何か、そのニーズを満たせるのは誰なのか？ これらに向き合うことは、この平和つくりの長旅への重要な一歩だろう。平和への理解が格段に広まり深まった。

~~~~~

Report by 田中あいな (本科3年)

### ■平和つくりへの修復的アプローチ

私が今まで受けてきた平和教育は確かに「戦争がないことが平和」という内容であり、戦争の悲惨さから平和を学ぶことに終わっていた。このことは大切であるが、自死・犯罪という暴力によって命を落とされる方が、戦争という暴力によって命を落とされる方よりも遥かに多い。戦争が無くなったとしても、その他の暴力に対する取り組みが引き続き必要である。私自身の「平和」が、一義的なものに過ぎなかったことを、驚きをもって気付かされた。

また、再洗礼派・メノナイトについても、新しい知識が与えられた。彼らは迫害が無くなった後、兵役免除により精神病院での働きなどを通して、この世に出ていった。このことによって聖書がより深く広く読み直され、聖書のシャロームに目が開かれた。それは心の問題にとどまらず、普段の生活に指針を与える。ここに本当の福音、そして宣教が見えたような気がした。メノナイトの平和についての考え方に学ぶことがたくさんあることを思う。その中でも「修復的正義」ということばに興味を持った。正義を求めるこの世であるが、そうではなく不正義に対応することが先にある。悪

人が罰を受けるだけでなく、傷の修復が求められる。さらにこの研修会でこのことについて学ぶことに期待が高まる。

### ■平和神学の聖書神学的基礎(宮崎師)

「平和」と一口に言っても、たくさんの意味があることを、現代のことから、そして聖書の中から教えられた。旧約聖書からイエス様の生涯まで、聖書から見る時、サムエル記でダビデが「戦争」と「シャローム」を並べて問うたことが印象的であった。王のシャロームと預言者のシャロームが対立しているが、イエス様の水平と垂直が一つつながりで行われていること。神を愛し、自分を愛し、隣人を愛す。イエス様が一つの「愛する」という動詞を使っておっしゃった。健全な愛のトライアングルは、神と人、人と人との平和につながる。イエス様の平和は軍事的な力によるものではなく、愛による平和であった。たくさんの「平和」理解があり、正直混乱を覚えたが、頭の中を整理しつつ、明日の研修会に臨みたい。

### ■ロールプレイで考える応報と修復

ロールプレイでこのように実際の事件について考えることは初めての経験であり、興味深い時間であった。事件のあらましを聞いた時、これほどまでに関係する人が多いとは思わず、当事者の多さに驚いた。被害者・加害者を含めてせいぜい4、5人程度だろうと浅く考えていたのであった。私自身は「被害者」のグループに属した。自分の考えもしなかったような広い視野が与えられたブレイクアウトルームは充実した時間だった。結論は「怒りをぶつける先が分からない」ということであった。メインルームに戻った後、被害者から話をすると想像していたがそうではなかったことに驚いた。被害にあった方が「あいつに会ったか？あいつがどんなやつか知ってからもう一度来い」と言うところに、被害を受けた方の痛みを思った。加害者の話やその家族の話を知り、自分が被害者に感情移入しているあまり、苦しい時間となった。それと同時に被害者に感情移入するあまり、加害者のこと、その背景が見えなくなっていたことが分かった。誰が被害者で

誰が加害者か分からなくなるこの現状に、どこに光が、平和があるのかと思った。思いもよらない多様なニーズを聞いた。実際のこの事件のてんまつは衝撃的であった。「生徒の退学」からは、どのニーズが満たされたのであろうか。まだまだ別のやり方ができるように思う。このセッションは、被害者の声を受け止め切れていない社会の現実を振り返るときとなった。

### ■たとえ話における正義と修復

「助けられてしまった人」のたとえ話ということばが新鮮であった。このたとえ話では、被害者に焦点が当てられている。名前はない、何をしたかは関係ない。典型的な犯罪被害者。傷口の手当では詳しく描かれる。今まで積み上げてきたことが、今起こったことに塗りつぶされる。しかしそれでも中心は被害者であった。祭司とレビ人は自分たちの規範的な状況と旅のリスクを考えて憐れみを失った。そして、サマリア人が正義の要求を全うしたのは、律法を超えた愛による。ローマ書の13章を思い起こした。「人を愛する者は、律法を全うしているのです」。このたとえ話は法に適用されているが、そこでは「助けることの重要性」が強調される。状況倫理の観点からも分かるように、法による限界があるのではないか。ここでも、イエス様がたとえ話によって語られたことの重要性を思う。

### ■福音書と主イエスの平和(宮崎師)

今回のセッションでは「嘆きの祈りと平和」が印象的であった。詩編では「あなたはどこにおられるのですか」と、他でもない神ご自身に向かって嘆く。神は私の認識できるところを超えて臨在しておられるからである。ウルリヒ・ルツは、十字架のイエス様の嘆きこそ、父なる神ご不在の絶望にさえ、インマヌエルであり子なる神がおられると語る。このような神がおられないという嘆きが、平和の入り口となることを今回のセッションで感じた。聖書は様々な箇所を通して、「72人の派遣」や「敵を愛せ」という箇所のように、主イエス・キリストによる平和を語っている。

### ■平和づくりにおけるイエスの役割／ 聖書的正義を捉え直す

五つの修復的正義の説明で、ここまでの学びがクリアになった。正義を表す語が千か所以上聖書にあるらしく、正義は聖書で言われていることである。そして神は、道の向こうにいる中立な裁判官ではなく、駆け寄る救護者である。修復的正義は、父なる神、子なる神、聖霊の関わることである。修復的正義に終わりはなく、終末を目指す長い旅である。安易な赦しを求めて、消去し、なかったことにすることは、修復ではない。現状に満足することは、正義とは反対である。陶工であられる神にかたどられ、聖霊に導かれ、イエス様の歩まれたように従うものでありたい。コミュニケーションによる赦しを求めていきたい。

### ■キリスト教会で実践するイメージ

「教会が平和であるべき」と掲げて、教会に何も持ち込まないならば教会は「聖」を保つことができる。もしそれができ、平和が訪れたとしても、教会の中では上っ面の交わりしか存在しない。そして、そんな教会に入れる人はいない。神の聖の前に立つことのできる人が、一人もいないからだ。しかし、イエス様はそうではない。本当の罪びととなられ、私たちの身代わりに十字架で死なれ、神の聖の前に立つことができるただ一人のお方である。この方による福音によって、教会に、そして世界に「平和」が与えられる。

この平和は、どのように教会で実践されるのだろうか。すべてのセッションを終えて最も印象に残っていることはやはり、ロールプレイである。自分がいかに物事を一義的に見ていたか気付かされた。それぞれの当事者に、それぞれの事件によるインパクトがあり、時間によってもそれが変わること、個々の当事者のニーズも一つではないことが驚きであった。一人一人の方々に丁寧何度もお話を聞き、修復的正義を求めること。そこに罰による解決はない。ロールプレイで「生徒の退学」によっては、だれのニーズも満たされなかったからである。

しかし、「罪を犯すならば天国に行けない」という刑罰代償説が教会のイメージとして、私の中に

根付いていることに気が付かされる。夜のディスカッションで一緒に、ある先生が「罰を恐れて罪を犯さないのは幼見的。罰というものは、その先の刈り取りが分かるためのもの。刈り取りの分からない子供に、親や先生が罰を与える。言うことを聞かなかったからご飯抜き、これは刈り取りではない。『お母さんのいじわる！』と言われたらそれまで。しかし健全な成長はその過程によって刈り取りが分かること。罰は刈り取りとイコールでない」とおっしゃった。またガラテヤ 5 章 6 節を引用された。信仰は愛によるのだと。

牧師研修会では、教団教派の違う先生との交わりが与えられている。また今回の講師の先生も、私と完全に同じ立場ではない。そのことによって混乱をきたし、私の求めていたものは、私の信じていたものは、いったい何だったのだろうかとも思った。修復的正義について、理解できた部分もあったが、拒否感を覚える部分もあった。「罰」に関する理解がそれである。ただ分かるの

は、罪人を排他的に外に締め出す教会に、救いをもたらすことが出来るのだろうか、ということである。私は「まだ神様を信じておられない方が救われるように」と祈る。この祈りをするときに、神様を信じておられない方というレッテルをもって、教会の外にその方々を見ているのかもしれない。

教会で「修復的正義」をどのように実践するかという答えは、私の中にはない。しかし、今回の研修会で学んだこと、特にロールプレイで感じたことを思い巡らしたい。まわりまわってもう一度思うことは「愛」である。愛は律法を全うする。愛によるものに信仰がある。赦されるはずのない、ボロボロの私を神様は愛してくださっている。イエス様が歩まれたその愛の歩みを聖書から見、イエス様に従うことを求めて、平和を求めて生きたい。そしてこの実践の中であって、なおも問い続けていく者でありたい。

## 新刊書のご案内

### 『平和をつくり出す神の宣教』

#### —現場から問われる神学—

#### *Mission of God the Peacemaker*



故ロバート・リー博士によって 1989 年に設立され、日本における福音宣教が持つ今日的課題に真摯に取り組んできた東京ミッション研究所。その設立 30 周年を記念した、弟子たちによる気鋭の論文集。(帯より)

- |     |                                                 |         |
|-----|-------------------------------------------------|---------|
| 序章  | 東京ミッション研究所 30 周年を迎えて                            | 金本 悟    |
| 第1章 | 古代エルサレムから近代東京へのパラダイム転換<br>—ポッシュより更なる展開へ         | ロバート・リー |
| 第2章 | 平和神学の基盤としての聖書学的枠組み                              | 宮崎 誉    |
| 第3章 | 修復的贖罪論の可能性を探る—パウロ神学の<br>「新しい視点」から               | 河野克也    |
| 第4章 | グレン・スタッセンの「受肉の弟子の道」の<br>位置と展望                   | 中島光成    |
| 第5章 | スタンリー・ハワーワスの「近代的自己」批判—カント<br>道徳神学における聖化との対比において | 中島真実    |
| 第6章 | 終末的苦難のなかでの世界宣教とイエスの弟子育成                         | 横田法路    |
| 第7章 | 被災地から問われる包括的福音—ローザンヌ運動の視点から                     | 西岡義行    |

■ 定価税込 1980 円 出版記念特価 1500 円 (2022 年 3 月末日まで)

■ 送料 1 冊 200 円 2~4 冊 400 円 5 冊以上 500 円

## 故泉田昭師 追悼文

金本悟 (TMRI 副理事長)

泉田昭先生が2021年9月16日に天に凱旋されました。泉田先生は、東京ミッション研究所の評議員や顧問も務めて下さいました。謹んで哀悼の意を表します。

泉田先生の多様な働きと貢献は多くの方々が認めているところです。泉田先生は、大局的観点から現実の世界を観察され、そこから、自分の果たすべき使命を見出されて実践してこられた方です。

超教派の活動としては、福音派の教役者の方々が励まし合うことができるように、同志をまとめて日本福音同盟 (JEA) を立ち上げられました。また、神学的思惟を深めるために、福音主義神学会の設立にも尽力されました。

私たちが東京ミッション研究所 (鍋谷堯爾評議員会議長、小林和夫理事長、ロバート・リー所長、斉藤孝志副所長、金本悟総主事) を立ち上げたときには、評議員として設立メンバーに加わって下さいました。研究所での国内外の神学者との交わりや学びをとおして、次世代の日本での宣教のあり方を考え、宣教活動を支援していきたいという泉田先生の情熱を感じました。当時、多くの方々が、ホーリネス (斉藤孝志師や小林和夫師) とメノナイト (ロバート・リー師) が一緒に研究所を設立するなど考えられないと発言されていました。しかし、大局観のある泉田先生は、もしそれが御心であるならば、人の目には不可能に思われるような試みでさえも実を結ぶ可能性があると感じて下さったのだと思います。泉田先生が研究所設立のために絶えず祈り支えて下さったことに今でも感謝しております。

また、東京ミッション研究所が出版したデイヴィッド・ボッシュの『宣教のパラダイム転換』も、丁寧に読んで下さり、多くの先生方に推薦して下さ

いました。同時に、東京ミッション研究所の課題は、ポストモダンの宣教パラダイムを生み出すための理念の「実践」であることも指摘して下さいました。泉田先生御自身は、高齢者福祉施設のキングスガーデンや精神障がい者の自立支援施設「ホサナホーム」、共同作業所「ホサナショップ」、地域活動支援センターの「シンプルライフ」などの設立・運営などに深く関わることによって理念を実践してこられました。

ボッシュの『宣教のパラダイム転換』の英語から日本語への翻訳作業は、カトリック、日本基督教団・NCC系、福音派系の諸先生方に依頼して行われたものです。その方々の共同作業が基となって日本宣教会が設立されることとなりました。その際に、福音派は泉田先生、カトリックは岡田武夫大司教、日本基督教団・NCC系は今橋朗牧師が顧問を引き受けて下さいました。それまで想像もできなかった、これらのキリスト教諸宗派が共に学会を立ち上げることができ、泉田先生はその一翼を担って下さったのです。

泉田昭先生は実に多様な領域で主に仕え、多くの言語学者、神学者、牧会者を育て、仲間の牧師たちを励まして下さった主イエス・キリストの良き弟子でした。大局的見地から世の中の出来事を観察され、宣教的思惟を深めつつ実践する牧会者でした。

改めて、泉田昭先生が東京ミッション研究所の出版物を多くの方々に勧めて下さり、研究所関係者を励まして下さったことに深く感謝いたします。そして、泉田先生と同じ時代に宣教活動に関わることができた幸いを主に感謝いたします。

※ 巻頭言より続く……

資本主義に生きているとするならば、その経済システムはキリスト教にもその宣教にも影響を与えています。聖書は経済について扱っていますから、それが大きなヒントになります。

イエスを通して示された福音が日本に住む人々の心に届き、この社会に浸透し拡大して、日本が神の価値観に変革されていくこと、そのために教会と TMRI が貢献していくことを祈り願うものです。

# TMRIからのお知らせ

## ◇夏季学校の報告

- 去る6月28日(月)~30日(水)に「平和づくりの神学—現場から聖書に聞く」をテーマに夏季学校がZoomにて開催されました。片野淳彦氏(5セッション)と宮崎誉氏(2セッション)が担当され、中身の濃い学びとなりました。

## ◇冬季フォーラムのお知らせ

- 来る2022年2月28日(月)午後、冬季フォーラムが予定されています。今回は、クラウド著 *An Intrusive Gospel?* の邦訳出版を記念して開催されます。講師は、翻訳者の南野浩則氏です。Zoom参加も可能です。ID: 859 9352 1018  
パスワード 820045

## ◇訃報

- 泉田昭氏が9月16日に天に召されました。TMRI

立ち上げから長きにわたり、理事および顧問としてかかわって下さり、宣教会の立ち上げにも貢献されました。ご遺族の上に主の慰めをお祈りいたします。

## ◇新たな助っ人紹介

- 事務作業の有償ボランティアとして桑原優子氏が助けて下さることになりました。PC設定のためにはご主人が労して下さいました。

## 献金者名

2021.5.18~2021.11.9 (敬称略、\*印は複数回)

- ◇団体: 長井教会、鹿児島武キリスト教会\*、新井キリスト教会\*
- ◇個人: 西岡義行\*、蘇基昊・丁敏任、飯島延浩、小関謙治、金本史子、金本悟、水間照弥、東條隆進、匿名

\*尊い献金を心から感謝いたします。

本注文 tokyomission1989@gmail.com

## ◇◇◇◇◇◇◇ 東京ミッション研究所の関係書籍案内 ◇◇◇◇◇◇◇

- 『天皇制の検証—日本宣教における不可避な課題』 ロバート・リー編 新教出版社 1815→1400円
- 『これからの日本の宣教—発想の大転換』 TMRI編 いのちのことば社 2200→1500円
- 『宣教のパラダイム転換上・聖書の時代から宗教改革まで』 D. ボッシュ著 7370→6000円
- 『宣教のパラダイム転換下・啓蒙主義から21世紀に向けて』 D. ボッシュ著 8250→7000円  
TMRI訳 新教出版社(上下一括割引 15600→12500円)
- 『日本と西洋キリスト教—文明の衝突を超えて』 ロバート・リー著 TMRI訳 2940→2400円
- 『<聖>をめざす旅』 アラン・クライダー著 棚瀬多喜雄訳 東京ミッション研究所 3300→2500円
- 『社会を動かす礼拝共同体』 J. H. ヨーダー著 矢口以文・矢口洋生・西岡訳 TMRI 3080→2300円
- 『愛する人が襲われたら』 J. H. ヨーダー著 棚瀬多喜雄訳 TMRI 2100→1500円
- 『赦し—新しい人間関係を生み出す』 D. アウグスバーガー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 1700円
- 『イエスの平和を生きる—激動の時代に読む山上の説教』 グレン・スタッセン、デービッド・P・ガッシー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 2100→1700円
- 『平和の契約—福音の聖書神学的理解』 ウィラード・スワートリー著 東京ミッション研究所訳 いのちのことば社 特別価格 7140→5000円(まとめて買うとさらに割引が可能です。)
- 『敵対から共生へ—平和づくりの実践ガイド』 ジョン・ポール・レデラック著 水野節子・宮崎誉共訳、解説・片野淳彦、西岡義行 東京ミッション研究所 ヨベル社 1100円 → 800円
- 『ジョン・H・ヨーダーの神学—平和をつくり出す小羊の戦い』 ヨーダー研究会(中島真実、矢口洋生、藤原淳賀、マーク・ネイション) 東京ミッション研究所 新教出版社 2090円 → 1700円
- 『神の宣教—聖書の壮大な物語を読み解く』 クリストファー・ライト著 TMRI訳 いのちのことば社 第1巻 3080→2500円 第2巻 3410→2700円 第3巻 2980→2400円 全巻 9460→7000円
- 『イエスの足跡に従う—アナバプテテストの伝統』 A. スナイダー著 中川美弥子訳 矢口以文共訳 東條隆進監修 東京ミッション研究所 2000円 → 1500円
- 『社会に開かれた教会—地域の福音となる新たな一歩』 西岡義行、井上貴詞共編 いのちのことば社(TMRI協力) 1540円 → 1200円 (3冊以上は送料無料)

**新刊** 『平和をつくり出す神の宣教』(創立30周年記念論文集)ヨベル社 1980円 → 1500円